

COOP-JOSO News Letter

2020年9月3回号 発行/常総生協広報G

2020年度活動テーマ案「JOSO食材でかんたん・うちごはん ～食卓から笑顔あふれる未来へ～」

＼新米／9月3回から水海道のお米 「めぐみちゃん」がスタートします！

今年も9月3回から水海道のお米「めぐみちゃん(コシヒカリ)」がスタートします。めぐみちゃんとは、生産者である「東町特裁米耕作者組合」と常総生協がお付き合いを始める時に付けたお米のブランド名です。めぐみちゃんの産地である常総市は、一級河川の鬼怒川・小貝川に挟まれ、肥沃な大地が広がる米作りに好条件な地域です。コシヒカリの特徴である甘みと粘り気のある食感を、米作りのプロたちが最大限引き出しています。



●常総生協とめぐみちゃんの歴史

◆出会い

さかのぼること1993年。全国的な不作による「米不足」が発生した年です。この年、どこの生産者や取引先からもお米の入手が困難だった時、私たちの地域の「東町特裁米耕作者組合」の皆さんが常総生協へ新米を全量出荷してくれました。

◆農薬空中散布の廃止

当時、東町は農薬の空中散布が行われていました。常総生協では自然なままの安心なお米を組合員に届けたいと、生産者に空中散布の中止を提案をしました。最初は反対もされましたが、頻りに田んぼに通う事でお互いの事を知るようになってきました。そして、生産者と生協が一丸となり空中散布を除外するよう運動を始め、その2年後に空中散布の除外地域指定となりました。

◆限りなく農薬をゼロに

めぐみちゃん(コシヒカリ)は「種」についてもこだわりがあります。水稻に感染する病害の多くは種もみに潜んでいるため、苗どこを作る前＝「種もみ」の時点で化学合成農薬を用いた消毒をおこないます。対してめぐみちゃんは、農薬の代わりに「65℃・10分」の温湯消毒で種子消毒をおこなっています。

また、1999年より「農薬無散布でお米を作れるかどうか」組合員と共に無農薬実験田を開始。毎年生産者の努力で農薬成分量を減らし、現在は初期除草剤1回までに抑えています。めぐみちゃんの「実験田」は単なる田植え・除草・稲刈りの体験の場だけではありません。たとえば、宮城の黒澤さんのお米は無農薬で作っているのであれば、この地元の水海道でも同じように無農薬で作れるのではないかと考えたからです。生産者の方も「初期除草剤を無くすのは難しい」とのことで、今年も実現はしていませんが、この実験田だけは無農薬でやる！とこちらの「意地」の

ような気持ちもあります。※今年新型コロナウイルスの影響で、実験田の田植え・稲刈り体験 & 交流会は中止となりました。

◆共に歩む生産消費運動として

常総生協と東町特裁米組合は単なる"取引先"ではなく、組合員に安心して食べてもらえるお米を共に作り続けてきました。そのめぐみちゃんが今年も新米として登場します。地場のお米を食べて、太陽と土の"めぐみ"をいただきましょう！

9月3回はカタログ表紙に掲載しています。ぜひ新米の味わいをご家庭でお楽しみください。

東日本入国管理センター訪問（平和の集い・歴史を学ぼう 夏休み企画）開催報告②

7月に生協で牛久にある「東日本入国管理センター」訪問を呼び掛けたところ大勢の方の応募がありました。が、面会室は入室可能な人数に限られていることから2日間に分け、「牛久入管問題を考える会」の方に同行する形で被収容者に面会してきました。

日本全国に「出入国管理局」の施設がありますが、入国者収容所管理センターは全国に2か所で「収容・送還」を目的としていて、そのうちの1か所が牛久にあります。（もう1か所は長崎県大村市）。しかしながら、牛久の施設は「男性」のみ。「女性」は品川（法務省・出入国在留管理庁）の収容施設に収容されているそうです。牛久入管の収容可能人数は700名（Wikipediaより）で、コロナ感染症流行以前は300名が収容。流行後は密集を防ぐため「仮放免」（=保釈金を払って一時的に施設外へ）を行い、8月時点では100名ほどが収容されています。

ここに入っている人は①在留資格がない人（ビザ延長申請し忘れなども含む）②不法滞在③不法入国④難民申請中の人（母国で迫害を受けているクルド人含む）などで、日本政府は「全件収容主義」といって、個別の事情や逃げる可能性の有る無しに関わらず、収容することとしています。

「収容」＝「保護」のイメージが湧いてきますが、入っている方は一様に「刑務所のように」と表現されます。以前は6畳ほどの部屋に3～4人（国も言葉も違う人たち）が入れられていたそうですが、今はコロナ感染症対策のため1人1部屋に、外から鍵をかけられて過ごしています。24時間、人との会話はほとんどなく、やる事も何も与えられず、強制送還を待たれている状況です。

8月12日（水） ※参加者合計15人

参加者	感想
Y.Aさん	8/12の牛久入管での面会に参加してきました。当日は牛久入管収容所問題を考える会の渡辺さんと一緒に3名の方に面会し、それぞれ30分くらいの時間をさいいただくことができました。その場では聞いたり答えたり自分で話題を進める方も。皆、日本は長く、日本語の会話はもちろん、漢字もある程度わかります。

	<p>なぜ収容されているかという、難民として認められてきたが、その後のフォローはなく、お金に困って、盗みを働いてしまった。（すでに刑は終え、罪は償っている）</p> <p>労働力としてきたが職を失い、動きが取れなくなりました。など、きっかけはあるものの、問題は収容所の中の刑務所以下の待遇。仮放免の段取りが整っているのにも関わらず、理由も告げられないままの長期収容。など一言でいえば人権がないがしろにされていることです。収容所は刑務所と違い、中で便役はありません。長い方は6年間も20代、30代の貴重な時間を何もしないまま過ごさなければならぬのが最もつらいと、それぞれ言葉は違うが話していました。</p> <p>少しでも生きる希望をつなげられるよう、趣味の世界のスポーツやマンガのことで力になることくらいしかできませんが、それでも何もしないよりはいい。同じ日本に住む、世間の人から分断される居場所を失うのは悲しい。何より悲しいのは存在を忘れられることだと思います。</p>
T.Yさん	<p>面会した方はブラジル国籍の松本さん。4年8か月ここにいるそうです。とても日本語が上手でご自身のおばあちゃんの話から始まって自分のことを話されていました。30分の面会でした。その後、団体代表の方から話を聞く機会があり、戦前の日本の植民地政策からの流れで、入国管理センターがあることを知りました。いろいろな理由があつてここにいるのですが、人間としての権利が大事にされているのか…日本人で日本にいるのに知らない、日本の入管制度の現状。</p> <p>8月12日の暑い日。青い空と緑深い森の中にあるこの建物。私の脳裏に残されています。</p>
S.Yさん	<p>3名の収容されている方と面会出来ました。日本語の勉強をされているなど、前向きに生きている印象を受けました。今回お世話になったボランティア団体の方は社会をよくしようと考えられていると思いました。そしてそれを行動にうつしている。生きる姿勢を感じました。それに比べて自分はぼーっと生きているなと思いました。</p>
M.Oさん	<p>私は、日系ブラジル人の男性（40歳代）との面会に同席させていただきました。次のようなことを聞きました。若いころに少年院に入ったことがきっかけで、このセンターに収容されていること。日本人であれば、少年院に入り更生した後に社会復帰しますが、日本人でないためにその道が閉ざされていること。家族は東海地域に住んでいることから、面会には来られないこと。4年余りにわたって収容され、仮放免のめどは全くわからず、何を努力すればよいかもわからないこと。私は法律や人権に詳しくありませんが、そんな私でさえ、聞けば聞くほど、「こんなこと日本がやってたの？ もしかして、外国籍の人には何をやってもいいと思ってるの？」と言葉を失いました。</p> <p>印象深かったのは、牛久入管収容所問題を考える会代表の田中喜美子さんが、午前の部終了後のレクチャーで、面会の目的について述べられた内容です。「大上段に構えた目的というのはありませんが」と前置きし、いくつかお話をした後、力を込めてこんな風におっしゃいました。「収容されている方が受けている劣悪な待遇（制圧など）は、面会を通じてでしか知り得ない。私たちが（彼らから聞いて外に）伝えない限り、誰にもわかりません」直前に面会した前述の日系ブラジル人男性の顔を思い出し、「知り得た」私がこれからどうするか、試されている思いがしました。もう一つ、とても気になったことがあります。牛久入管の敷地の荒れようです。門を入ると駐車場があり、やけに広々とした車寄せがありますが、全面的にアスファルトの隙間などから雑草が伸び放題。たまたまお盆時期の手入れが滞る時期だったからののかもかもしれませんが、それにしただって、あんなに草ぼうぼうの公共施設は見たことがありません。一瞬、廃墟かと目を疑ったほどです。</p> <p>「日本人が収容され、日本人が面会に来る場所であれば違ったのかな」冷房があまり効いていない面会待合室で、収容者の家族と思われる外国人の方々が多数待っておられるのを目にしてふと思ひ、いっそうどんよりとした気持ちになりました。</p>
Y.Aさん	<p>今回、東日本入国管理センターで、ご説明ご案内いただいた牛久の会の渡辺さんと、この訪問の機会を作ってくださった常総生協に感謝申し上げます。新聞やニュー</p>

	<p>スを通し入管で起きていることがずっと気になっていました。8月12日、牛久の会の渡辺さんの後について、ベトナム・ネパールの30代～50代の3人の男性と30分ずつ面会させていただきました。入管に至るまでの経緯がそれぞれですが、皆、1年半から4年にわたる長期拘留の間に何度も仮放免申請却下されています。この日も直前に申請却下の知らせがあったようでした。渡辺さんは会話の合間に精神安定剤や睡眠導入剤に頼らず暮らせているかと心配し、尋ね励ましていました。3人とも、10年以上の日本で生活で覚えた日本語で落ち着いて丁寧に答えてくれました。でも、窓の無い居室、監視・管理される生活、先の見えない毎日の中で精神的にまいってしまう人や抗議のハンストで体を壊してしまう人もいます。え?! 外の病院に行くときは腰縄、手錠をつけるんですか! ここに収容されている方々は犯罪者じゃないですよ! 渡辺さんが勧めてくれた鳥居一平の「国家と移民」からの抜粋です。</p> <p>『現在、「不法滞在」で入管の収容所に拘束されている大多数の人々は、いったいどういった人たちでしょうか? 彼ら彼女らこそ、日本経済を担い、長年にわたり日本を拠点に生活を営んできた人々です。それなのに、ひとたび不景気になり都合が悪くなるとそれまで多くの日本人がやりたがらない仕事を引き受けてくれていた人たちを「不法だ」と言って狩りて逮捕し、入管の収容所に放り込んだり強制送還しているのです。』</p> <p>今回はコロナのこともあり、参加できなかった人も多くいると思います。ぜひ、またお願いします。</p>
S.Mさん	<p>生協で今回のような企画をしていただいたことに感謝申し上げます。牛久に、難民の方々の収容施設があること、外国人の方々（収容されている方々）の話聞き少しでも力になろうとするボランティアの方々が日々活動してらっしゃること等、初めて知る事ばかりで本当に勉強になりました。田中先生から、外国人に対する人権問題が戦前の植民地支配から続いている話を聞きこれは本当に政治問題だと思いました。面会では、パキスタンの方とナイジェリアの方のお話を聞くことができました。ボランティアの篠崎さんは「いつも見守っているから何でも話してね」と、とても温かい眼差しで語り心を開いてくれることを願っているようでした。何も悪いことをしていないのに自由のない収容所で何年も生活しなければならない実態を身近な人に話し、広めていこうと思います。ありがとうございました。</p>
生協職員 木本	<p>私は8/12午後、収容されている20代～30代の3人の男性(ウガンダ出身1名、カメルーン2名)、と30分ずつ面会することができました。ありがとうございました。</p> <p>(※撮影禁止の為面会室の様子をデッサンしました。→)</p> <p>犯罪を犯したわけではないのに捉えられ、救済措置はなく、仮放免の基準も知らせてもらえない彼ら。模範的に過ごしていても、4年も5年も家族から引き離されて拘束されていて、出してもらえない理由も教えてもらえない。</p> <p>カギを掛けられた一人きりの部屋で、何もするこゝとを与えられず、毎日を過ごさねばならない、テレビはあってもインターネットはない、電話は公衆電話だけ、食事一人部屋で会話もできない、孤立を極めた場所。みな精神的に追い込まれ、睡眠障害をおこしている人も少なくない。収容所の生活は彼らの言葉では「HELL (地獄)」なのですが面会で掛けられる都留さんのあたたかい言葉に励まされていました。</p> <p>「ここを出たら何がしたいですか?」と聞いたら、30代の男性は「11歳の娘に会いたい」「家族に会いたい」と言い、20代の男性は「日本を見てみたい(空港から直接ここに連れてこられたため日本を知らないそう)」と話していたのが印象的でした。</p>

